

郷土の

偉人

刻苦勉勵の学者

いなげ そふう  
稲毛 詛風

稲毛詛風は、明治 20 年（1887 年）池黒に生まれ、幼名は金七と言いました。家は貧しい駄菓子屋で、村々でのお祭りにはよく母を助けて菓子売りをしていたそうです。

金七少年は、漆山小学校 4 年を卒業すると宮内小学校高等科に入学。卒業するとすぐ 13 歳で同校の代用教員になりました。すごいですね。ただ、実は金七は本当は中学校に進んで勉強しなかったのですが、家が貧しく進学できなかったようです。

その後、小学校に勤めながらひとりで勉強を続け、明治 35 年（1902 年）に正教員の検定試験に合格しました。また、上伊佐沢小学校、金山小学校にも勤めました。

しかし、金七には東京の大学に入って正規の勉強をしたいとの思いがずっとあったようです。小学校の恩師である橘先生に毛筆で書いた 5m もある長い手紙がありますが、これには金七の強い勉強心が見てとれます。

明治 39 年（1906 年）4 月、金七はついに上京を果たし、早稲田大学に入学しました。漆山地区の有力者たちが学資を援助してくれたのです。詛風は生涯忘れられない御恩だと話していたそうです。

大正元年（1912 年）に早稲田大学文学部哲学科を卒業、中央公論社の雑誌記者、評論家として活躍、また種々の教育書を出版しました。大正 12～15 年には自費で欧州留学、おもにドイツ・ベルリン大学で哲学と教育学を研究、昭和 2 年（1927 年）、母校早稲田大学の講師、次いで教授となり、同 16 年（1941 年）「教育哲学」の研究で文学博士となりました。

詛風は寸暇<sup>すんか</sup>を惜しんで勉強しましたが、貧しかったため三度の食事を二度や一度にして勉強したと言います。また、大変な読書家で、家の人はせめて食事の時だけは読書をやめてくれと言っていたそうです。色紙を頼まれるといつも「不断の自己超越」と書きました。この言葉通りに生きたのが稲毛詛風でした。著述は 60 余編になります。

昭和 21 年（1946 年）3 月 14 日、詛風は刻苦勉勵の生涯を終えました。

文・須崎寛二

平成 24 年 9 月 1 日号 市報なんよう掲載

